

目指せ日本一！夏秋どいいちご経営の安定化を推進

～いちごの収量向上と新規作物導入による所得向上（浦河町富里地区）～

◆活動年次：平成28～令和2年度

（課題番号 5）

◆対象：浦河町富里地区（18戸）

1 背景とわらい

- 1) 重点対象地区の夏秋どいいちご出荷量は、地域平均よりも高い。しかし、価格が低い夏季に収量が集中するため所得を上げられず、経営が不安定であった。
- 2) 農業所得を向上させるため、総収量を維持しながら、単価の高い秋季収量の割合を向上させる必要があった。さらに、単価の年次変動に対応したリスク分散を目的に、新規作物の導入を検討し、より安定した経営を目指した。

2 活動経過

平成28年

- ①3つの重点技術を提案(夏季の弱小花房除去、葉数の確保、株疲れ時の葉面散布)
- ②実証ほの設置による実践指導・データ(生育・収量)の収集



重点地区懇談会

平成29年

- ①4つの重点技術を提案(夏季の弱小花房除去、葉数の確保、株疲れ時の葉面散布、芽数制限)
- ②実証ほの設置による重点技術指導



現地での技術指導

平成30年～令和元年

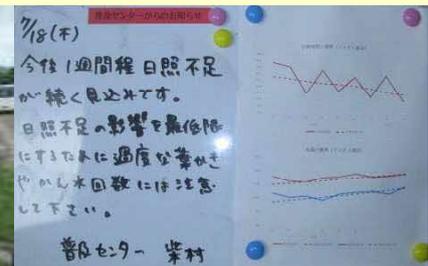
- ①新規作物(冬取りレタス・トルコギキョウ苗・寒締めほうれんそう試作)を導入した複合経営の提案
- ②4重点技術に加え、着果制限(1株当15果以下)・障害果(着色不良果、果皮軟化、裂果)対策を個別指導と現地研修会で推進



冬取りレタスの巡回指導



農業者との意見交換



選果場に設置したホワイトボードによる情報提供

令和2年

- ①秋季いちごの収量向上に向け、6重点技術を戸別巡回等で推進
- ②着色不良果の発生原因を調査(調査ほによる生育・果実の調査、農業者聞き取り)
- ③新規作物(冬どりレタス、寒締めほうれんそう、トルコギキョウの苗)を導入した複合経営を推進



着色不良果調査

3 活動の成果

その1 農業者の声

夏秋どりいちごは秋季の収量アップが経営には重要。提案された秋季収量の向上技術を続けていく。

レタスは、少ない労働時間の割には利益になった。余っているハウスも有効活用できた。

トルコギキョウの育苗は難しいが、面白い。所得向上にもつながる。

その2 地域への波及

いちごの秋季収量向上のために推進してきた6技術は、重点地区から波及され、夏秋どりいちごを栽培する浦河町・様似町にも定着している。

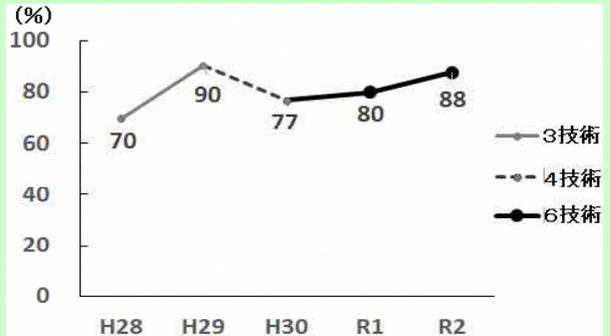


図1 秋季収量向上技術の年次別取り組み割合

その3 新規作物の作付け

重点地区では、新規作物として冬どりレタス、トルコギキョウ苗が栽培されるようになった。農業者はシーズン毎の状況に応じて、新規作物の栽培に取り組んでいる。

表 富里地区における園芸作物の作付面積 (m²)

	H28	H29	H30	R1
いちご	3,226	2,868	2,875	3,055
冬どりレタス	0	175	175	0
トルコギキョウ苗	0	0	30	90
合計	3,226	3,043	3,080	3,145

その4 収量性

- ①重点地区である富里地区で推進してきた技術の励行が、秋季いちごの収量割合向上に繋がることが明らかとなった。
- ②重点地区の平均収量は、地域全体(JAひだか東管内)の値を上回っている。
- ③秋季収量向上技術が、地域全体に波及されたことで、地域の夏季と秋季の収量割合は5:5を維持するようになった。

提案・波及した6つの技術ポイント

- (1) 弱小花房の除去
(7~8月5花以下の花房を除去)
- (2) 葉数確保
(7~10月の生葉数を概ね25枚/株に維持)
- (3) 葉面散布
(株疲れ発生時に葉面散布剤を施用)
- (4) 芽数制限
(7~8月に3芽/株に制限、以降は放任)
- (5) 着果制限
(7~8月の果実は15果/株に制限)
- (6) 障害果対策
(着色不良果、果皮軟化、裂果対策の実施)

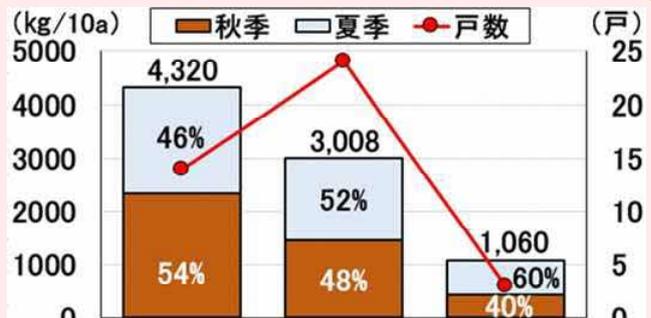


図2 秋季収量向上6技術の実施状況と収量

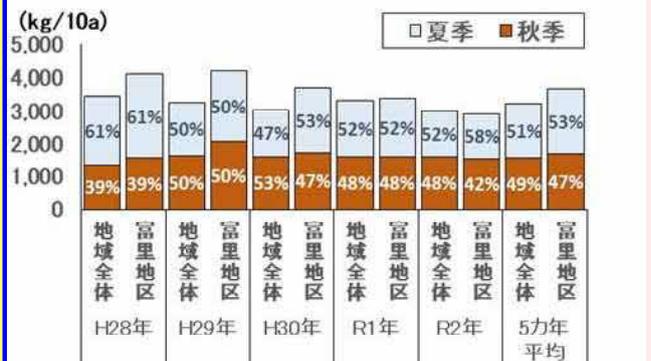


図3 10a当たり収量と夏季・秋季の収量割合

4 今後の対応

いちごの着色不良果調査のまとめと分析を実施する。